

第193回（平成31年2月17日施行）

1級原価計算・工業簿記

第1問 従来通り「原価計算基準」の内容から出題しました。単に「原価計算基準」を丸暗記するのではなく、原価の特殊原価調査の概念や、原価差異の算定等の基本的な手続も理解するよう努めてください。

1. 原価計算基準2よりの出題です。原価計算制度が臨時的な目的でなく、財務会計の機構と結びつき、常時継続的に行われるものであることをしっかり認識しているかを問うています。
2. 原価計算基準10の費目別計算における原価要素の分類からの出題です。形態別分類、機能別分類の意味を理解しているかを問うています。
3. 原価計算基準28、29の副産物、連産品の計算からの出題です。連産品の条件を理解できているかを問うています。

第2問 製造業における仕訳の問題です。すべて過去問題を参考に出題しています。

1. 材料消費価格差異に関する問題です。基本的な構造を理解しているかを問うています。
 $(¥1,450 - ¥1,380) \times 2,500\text{kg} = ¥175,000$ の有利差異になります。
2. 作業くずの処理を問う控除する仕訳です。評価額を仕掛品勘定から控除します。
3. 予定賃率を用いて直接労務費を振り替えたのち、賃率差異を計算するための仕訳です。予定額より実際額の方が大きくなるため、不利差異になります。
4. 減価償却の記帳方法および本社、工場会計に関する問題です。直接法と間接法の違いおよび工場勘定の使い方をしっかり理解しているかを問うています。
5. 組別総合原価計算における組間接費の配賦の問題です。組間接費の¥4,160,000をA組仕掛品とB組仕掛品に55%と45%の割合でそれぞれ配賦します。
6. 値引きが行われた際の基本的な仕訳になります。

第3問 本問は標準原価計算による仕掛品勘定への記入を問う問題です。仕掛品勘定の借方に実際原価、貸方に標準原価を記入して仕掛品勘定上で原価差異を計算する「パーシャル・プラン」という記帳方法を把握しているかを問うています。以下のように順を追って記入数値の説明をします。

- ① 直接材料費の実際発生額を材料勘定から仕掛品勘定へ振り替えます。
 $¥784,000 + ¥2,346,000 - ¥962,000 = ¥2,168,000$
- ② 直接労務費の実際発生額を賃金給料勘定から仕掛品勘定へ振り替えます。
 $¥2,246,000 - ¥431,000 + ¥482,000 = ¥2,297,000$

- ③ 製造間接費の実際発生額¥3,491,000を仕掛品勘定へ振り替えます。
- ④ 完成品の金額を標準原価にもとづいて計算し、製品勘定へ振り替えます。
@ ¥1,350 × 5,600 個 = ¥7,560,000
- ⑤ 月末仕掛品原価についても標準原価にもとづいて計算しますが、加工進捗度が関係しない直接材料費と、関係する直接労務費、製造間接費（合わせて加工費）に分けて計算します。
直接材料費：@ ¥360 × 400 個 = ¥144,000
加工費：(@ ¥390 + @ ¥600) × 400 個 × 50% = ¥198,000
これらの合計が¥342,000になります。
- ⑥ 最後に、仕掛品勘定の貸借差額で計算した¥54,000が標準原価差異になります。

第4問

本問は、個別原価計算を採用している場合の勘定の記入および原価計算表の作成の問題です。その中に、基本的な部門別計算や材料消費価格差異、賃率差異、製造部門費配賦差異の計算、処理なども含めて作成しており、勘定全体の構造と原価計算表の完成までの一連の流れを網羅的に問うような問題になっています。類似の問題が過去にも複数出題されておりますので、条件の違いによる結果の違いなども併せて学習してみると良いかと思えます。